

感謝の言葉をめぐってー「ありがとう」「すみません」など

(内藤俊史・鶯巣奈保子、2020)

人から恩恵を受けたとき、私たちは、恩恵を与えてくれた人やものに対して、いろいろな方法で感謝を伝えようとします。そこで用いられる言葉は、「ありがとう」「すみません」等、多様です。それらの言葉の使用やその背景となる心理は、社会言語学者によって検討されてきました。ここでは、それらの研究結果のいくつかを紹介します。

1. 「感謝系」と「謝罪系」

他者から恩恵を受けたときに使われる言葉にはいろいろなものがありますが、それらは「感謝系」と「謝罪系」として分類されることがあります(例えば、岡本 1991、1992)。前者は、「ありがとう」という言葉のように、恩恵を与えてくれた対象に対する愛着や尊敬を含むポジティブな感情を含む言葉です。そして後者は、「すみません」のように、恩恵を与えてくれた対象に対して、負い目や後悔など、ネガティブな感情も含む言葉です。

以下に、それぞれの言葉の来歴などについて紹介します。

(1) 「ありがとう」感謝系

感謝は、さまざまな言葉によって表現されます。東京では、「ありがとう」「ありがとうございます」がよく用いられます。各地の方言をみると、関西地方では「おおきに」、島根県や愛媛県では「だんだん」が方言として知られています。ところで、「ありがとう」の語源は、「有り難し」とされます。つまり、あるのは難しい、つまり、存在し難いこと、貴重なことという意味であり、仏教の世界で貴重な教えなどに対して用いられたものが、近世以降、感謝を意味する語として人間に対しても用いられるようになったといいます(山口、1988)。

(2) 「すみません」謝罪系

「すみません」という言葉は、感謝を表現するときだけではなく、謝罪の際にも用いられる言葉であり、その使用や背後に想定される心理について、内外の社会言語学者の関心を集めてきました(例えば、Coulmas、1981: 岡本、1991、1992: 三宅、1993)。

歴史的には、謝罪のために用いられた言葉が感謝を表すために使われるようになることは古くからみられるそうで、江戸時代には「はばかり」、明治以降は「すまない」という言葉がその例であるといわれます(西村、1981)。ま

た、「かたじけない」という言葉は、現在でも時代劇などで聞くことがあります。この言葉は、平安時代からある言葉で、「すまない」とほぼ同義であったようです。

民俗学者の柳田国男によると、すまないとは、心が澄んでいないという意味であり、相手が自分に対して期待以上の不釣り合いな行為をしてもらったために、自分の心が安らかではないという意味であるといいます（柳田、1964）。

2. 二つの言葉はどのように使い分けられるのか

それでは、現代において、謝罪の際にも用いられる「すまない」という言葉を初めとする謝罪系の言葉と、もっぱら感謝の目的で用いられる「ありがとう」などの感謝系の言葉は、どのように使い分けられているのでしょうか。

佐久間（1983）は、「許しを乞う気持ち—自責—恐縮—喜び」という心理の連続線に沿う形で、「ごめんなさい」—「すみません」—「恐れ入ります」—「ありがとう」という言葉が用いられるという説を提案しています。また、自己志向—他者志向という区別を用いて、「ありがたい」と「すまない」という言葉の使用について説明をしています。すなわち、自己の利益に焦点を当てた場合に「ありがたさ」が強調され、他者に向けられたときに「すまなさ」に焦点が当たるのだといいます。

これらの図式は、その後の言語学における実証的な研究に影響を与えていました。研究の一つを紹介します。

岡本（1991、1992）は、女子短大生（104名）に感謝の生じる場面を示した上で回答を求め、その回答を感謝型（感謝、ありがとう）、謝罪型（すみません、ごめんなさい）に分類しました。その結果、感謝型の使用頻度は、相手の負担の大きさ、話し手の負目と負の相関があり、気楽さ、気分の良さと正の相関が見られました。また、関係が親密であるほど、感謝型の言葉が用いられました。他方で、謝罪型の使用は、これらと逆の相関のパターンを示していました。相手のコストが大きな影響を与えますが、別の要因も関与していて、贈物を贈る場面ではコストがそれほど小さくないのに謝罪型に比べて感謝型が多用される傾向がありました。

他者への負担に関心が向く場合に「謝罪系」、そして自己の利益へ関心が向く場合に「感謝系」という図式は、私たちの言葉の使い方を省みると、説得力がありそうです。

三宅(1993)は、「すみません」という言葉が、恩恵を与えてくれた人に負担がないときには使えないことを指摘し、そのことは、「すみません」という表現には恩恵を与えた者の負担が関わることを意味すると主張しています。

私なりに説明を加えれば、買い物をしたお客さんに対して、店員は「ありがとうございます」とはいっても「すみません」とはいいません。募金箱に募金をしてくれた人に、「ありがとうございます」とはいっても「すみません」とはいいません。どちらも、相手の負担を慮る場面ではないからです。これらは、すまないという言葉が、相手の負担に対する気持ちを表現するものであり、負担に言及することが適切なときにのみ用いられることを示しています。

まとめ

恩恵を受けたときの言葉による対応としては、謝罪系と感謝系があります。ともに、相手に感情を伝えることには変わりはありませんが、それぞれ、相手の負担に関心が向く場合、そして自己の利益に関心が向けられる場合に用いられます。もちろん、それらの言葉の選択に影響する要因は、その他にもあるでしょう。例えば、恩恵を受けた者と与えた者との関係をあげることができます。身近な人物からの援助と見知らぬ人からの援助では、感謝やすまなさの表現の仕方が異なることは確かです。例えば、親密な関係にある人からの援助に対して、「すみません」と言ってお礼をしたときに、「みずくさい」と言われた経験をもつ人もいるでしょう。

なお、私たちが、「すまない」「ありがたい」という言葉を用いているからといって、それらに対応して「すまないという心」「ありがたいという心」が存在すると考えるのは、必ずしも正しいとは限りません。

謝罪系と感謝系の言葉が、それぞれどのような心理的メカニズムによって生み出されるのかが、さらに明らかになることを期待します。

文献

Coulmas, F. (1981). Poison to your soul in: *Thanks and apologies contrastively viewed*. In F. Coulmas (ed.), *Conversational routine*. The Hague: Mouton, 69-91.

- 三宅和子. (1993). 感謝の意味で使われる詫び表現の選択メカニズム: Coulmas (1981) の indebtedness 「借り」 の概念からの社会言語的展開. 筑波 大学留学生センター日本語教育論集, (8), 19-38.
- 西村啓子 (1981) 「感謝と謝罪の言葉における<すみません>の位置」. 日本文学 ノート. 第 16 号, 宮城学院女子大学日本文学会.
- 岡本真一郎. (1991). 感謝表現の使い分けに関する要因. 人間文化: 愛知学院大学人間文化研究所紀要, 6, 95-105.
- 岡本真一郎. (1992). <論文> 感謝表現の使い分けに関する要因 (2): 「ありがとうございますタイプ」 と 「すみませんタイプ」 はどのように使い分けられるか. 愛知学院大学文学部紀要, 22, 35-44.
- 佐久間勝彦 (1983). 感謝と詫び. 水谷修編 話しことばの表現講座日本語の表現 3, 筑摩書房, 54-66.
- 山口佳紀 編 (1988). 暮らし言葉語源辞典. 講談社.
- 柳田国男 (1964). 毎日の言葉. 角川書店.